

うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンピラ
 第22号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0156
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



赤嶺 健治
 （うるくの歴史と文化を語る会 代表）

15年間の活動を顧みて

本会は、平成14（2002）年5月に発足して以来、今日まで15年以上活動を続けてまいりました。代表は、初代の新垣敏雄、2代目の當間一郎に続いて、私が3代目を務めています。会員は53名を数えます。これまで、本会の活動のために、多くの団体や個人が、多大な物心両面のご支援を差し伸べてくださいました。JAおきなわ小禄支店、鏡水郷友会、宇栄原郷友会、字大嶺向上会、大嶺自治会から、有難い寄付金や賛助金を頂戴いたしました。本会の年次定期総会と併催される記念講演会へは、那覇市役所、那覇市教育委員会、沖縄県伝統工芸団体協議会、沖縄県立埋蔵文化財センターから専門職員を講師として派遣して頂いたほか、琉大、沖大、地域の有識者の方々が講師を務めてくださいました。この場を借りて、改めて心より感謝申し上げます。

昨年6月に開催された第15回定期総会の際の記念講演は、沖縄県立埋蔵文化財センター調査班主任の大堀皓平氏による「大嶺村跡の発掘調査」の成果を伝える興味深い内容でした。埋蔵文化財センターが作成したこの発掘調査に関する資料を、本号の2ページから3ページに掲載してありますのでご覧ください。この資料の掲載を快く承諾して下さった埋蔵文化財センターに厚くお礼を申し上げます。

本会が発行する『会報ガジャンピラ』も本号で第22号となります。会報には、特別講演講師の寄稿や会員による調査研究成果の報告等が掲載されています。毎年、小禄地域と周辺の関連する地域の歴史と文化にまつわる名所旧跡を訪ねる「うるくまーい」を実施してまいりましたが、今年2月18日に第13回目を実施いたします。

小禄間切、旧小禄村の風土と環境及び歴史と文化に関心をお持ちの方々の本会活動へのご参加を歓迎いたします。今後とも、本会へのご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

第15回総会を開催す

平成29年6月22日にJAおきなわ小禄支店3階ホールにて総会を開催しました。活動報告、会計報告、活動計画が承認されました。

総会終了後に沖縄県立埋蔵文化財センター調査班主任の大堀皓平氏による「大嶺村跡の発掘調査」をテーマに記念講演が行われ、字大嶺より会員外の26名が参加しました。



総会の様子



講師：大堀皓平氏

大嶺村跡

那覇空港管制塔庁舎新築工事等に伴う記録保存調査。期間は2016（平成28）年3月1日～7月20日、2017（平成29）年8月5日（土）に沖縄県立埋蔵文化センターにて開催された第69回文化講座「発掘調査速報2017（その1）」内の大嶺村跡発表データの一部を許可を得て掲載致します。（紙面の都合で、図を一部割愛させていただきました。なお、発表データの動画と関連資料は「うるくニッポン（小禄日本）放送」のホームページにアップロードされていますので、併せてご覧ください。）

1. 発掘調査の目的

那覇空港について 那覇空港は、沖縄県の空の玄関口として、人と物資について県内外・国外を結んでいます。国内でも利用度が高く、近年は需要に対応し切れない状況となっています。そのため、今後の需要拡大等へ対応するため、新たな滑走路を新設することになりました。

発掘調査に至る経緯 滑走路の新設に伴って、これに対応する管制塔やそのパイプラインなども合わせて工事することになりました。

これらの工事箇所は、事前に那覇市市民文化財課が調査を行った結果、地中に「大嶺村跡」という遺跡（埋蔵文化財）が残っていることが分かっています。そのため、大阪航空局・那覇市文化財課・沖縄県教育庁文化財課の間で協議を行い、沖縄県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行うことになりました。

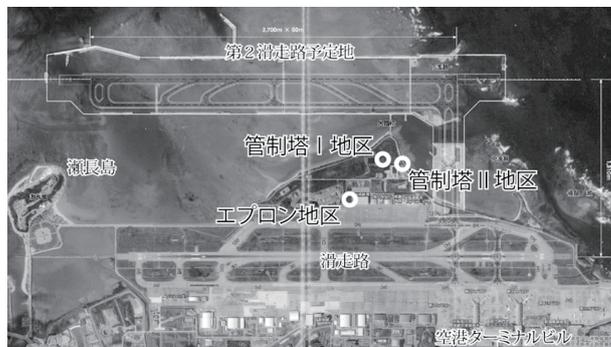


図1 発掘調査箇所（沖縄総合事務局那覇空港新滑走路整備推進室『NAHA Airport』に加筆）
管制塔Ⅰ地区、同Ⅱ地区、エプロン地区で発掘調査を行った。調査面積は合計約3,000㎡

2. 大嶺村跡について

近世の記録 大嶺村跡は、近世（1609～1878年）の文献や地図にその名をみることができます。例えば尚敬の副冊封使として1719～20年まで8ヶ月琉球に滞在した徐葆光の『中山傳信録』巻第四（1721年）には、大嶺については海辺にあってアダンの林があること、村の南に岩山があり絶景であることなどが記録されています。また、1750年頃に測量された琉球国惣絵図（間切図）にも大嶺村跡が描かれて、村の背後に馬場が書かれていることなどが注目されます。

近代 大嶺村は、明治になると小禄村字大嶺と改称されます。その後、昭和6年から旧日本軍小禄飛行場が建設され、戦争の激化に伴って拡張工事が度々行われました。1945（昭和20）年の米軍占領後、大規模な改修を行って那覇飛行場となり、1972（昭和47）年の本土復帰後は那覇空港として現在も運用されています。



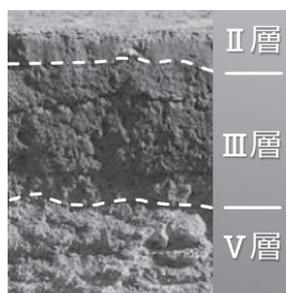
図2 琉球国惣絵図（間切図）に描かれた大嶺村
（沖縄県立博物館・美術館蔵）○部分が大嶺村



図3 1945（昭和20）年1月航空写真に写る大嶺村と小禄飛行場
（国土地理院地図・空中写真閲覧サービス USA-Okinawa-5M3A-7）

3. 管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果

管制塔Ⅰ地区 管制塔Ⅰ地区では、現代の地層を含めて4つの時期の地層が確認されました（図4）。



そのうちで大嶺村跡の頃の遺構が見つかったのは一番下のV層からで、当時の遺構や、ウマやブタ幼獣を埋葬したとみられる土坑が発見されました。特にウマは、体高が沖縄の在来馬より大きいので、近代に外国から持ち込まれた可能性が挙げられます。また、Ⅲ層からは遺構は見られませんが、大嶺村の時期のものとみられる多量の遺物が出土しています。また、これら近世・近代の遺物のほかに、少量ですがグスク時代や先史時代の遺物もみられます。

図4 管制塔Ⅰ地区の地層堆積

Ⅰ層：現在の土（写真では省略）・Ⅱ層：那覇飛行場～那覇空港時代の造成

Ⅲ層：戦中・戦後直後の造成（1945年頃）・V層：自然に堆積した海浜堆積物層（砂や貝殻・サンゴが混ざった砂層）

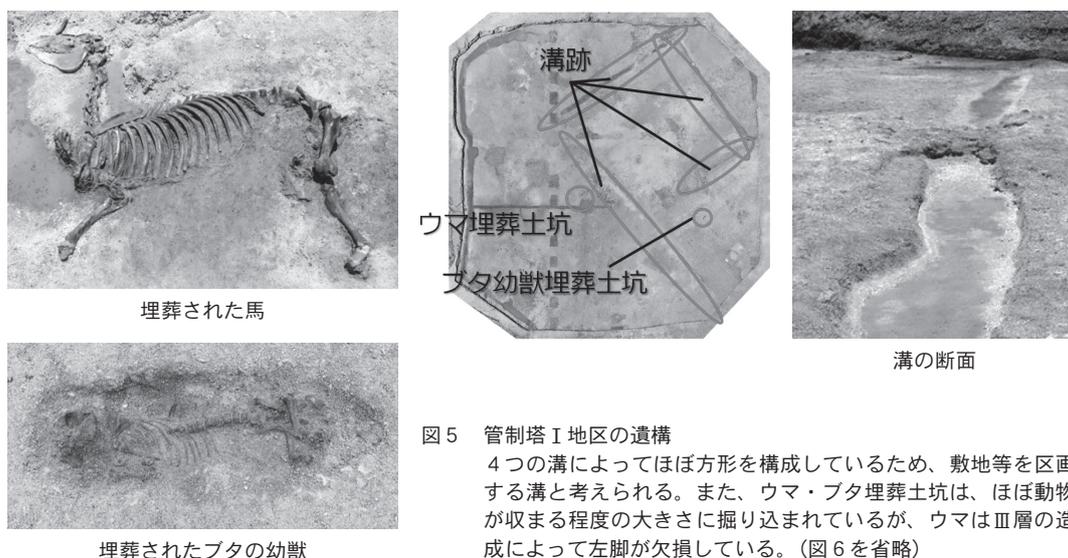


図5 管制塔Ⅰ地区の遺構
4つの溝によってほぼ方形を構成しているため、敷地等を区画する溝と考えられる。また、ウマ・ブタ埋葬土坑は、ほぼ動物が収まる程度の大きさに掘り込まれているが、ウマはⅢ層の造成によって左脚が欠損している。（図6を省略）

管制塔Ⅱ地区 管制塔Ⅱ地区では、海拔約0mまで戦後から現代にかけての造成土が厚く堆積していました。その下には自然に堆積した海浜堆積物層や、琉球石灰岩が確認されました。この地区から遺構は確認されませんでした。造成土からは近世・近代の遺物が現代のものに混ざって出土しています。

4. エプロン地区の調査成果

エプロン地区ではⅠ層からⅦ層までの地層が確認されました。中でも、Ⅳ層とⅤ層で多数の遺構が発見されています。地層堆積は、Ⅰ層：現在の表土・Ⅱ層：戦後の那覇空港の造成・Ⅲ層：戦中・戦後直後の造成（1945年頃）・Ⅳ層：填圧された砂層・Ⅴ層：白砂層、海浜堆積物層（自然堆積）・Ⅵ層：灰色化した海浜堆積物層（自然堆積）・Ⅶ層：島尻泥岩層（自然堆積）

Ⅳ層からは柱穴などのピットを含めると100基以上の遺構が見つかりました。中でも井戸や遺物を廃棄した土坑などが注目されます。井戸は3基発見されましたが、井戸1と井戸2は、井筒に使われた石材や構造などに共通点があります。

また井筒の石材の中に近代の遺物が混ざっていたため、この時代に造られたことが分かります。それに対して井戸3は廃棄穴の下にあったことに加え、石材の構造は井戸1・2と異なることから、これらの井戸より古い時代に作られた（おそらく近世）ことを窺わせます。廃棄穴は、近代の頃の陶磁器をはじめ、動物骨や貝殻などが多量に入っていました。出土した陶磁器は接合するとかなり本来の形に近いところまで接合することができました。この遺構からは、大嶺村の時代の道具の種類や、当時食べていたものなどを教えてくれる重要な発見です。

かまど？1

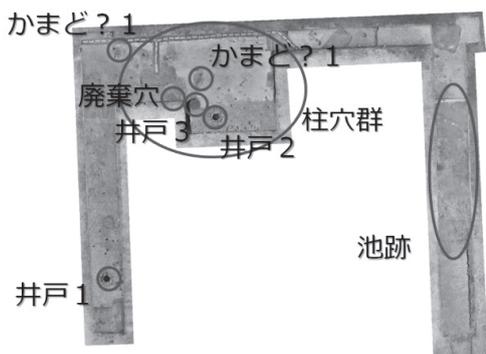


図7 エプロン地区の遺構
北側に多くの遺構が発見されている。特に井戸は約500m内に3基発見されている点が注目される。

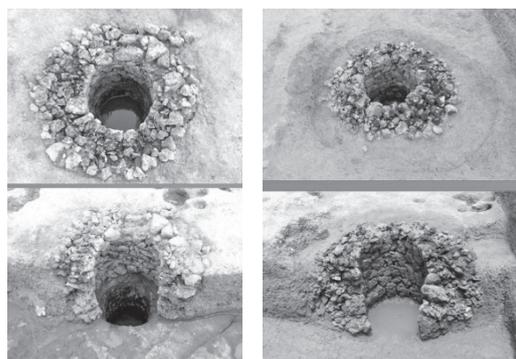


図8 井戸1・2
左：井戸1・右：井戸2
（ともに上が検出時、下は半分に分断した状況）



図9 井戸3 最下層の井筒石材のみ残存。石材が井筒の形にカーブして作られている点が井戸1・2と異なる。

5. 出土した遺物

大嶺村跡からは様々な遺物が出土しています。

大嶺村が営まれていた近世・近代の遺物が中心ですが、それより前のグスク時代や弥生～平安並行時代の遺物も発見されています。このことから、大嶺村が営まれるより以前から人が暮らしていたことが窺えます。

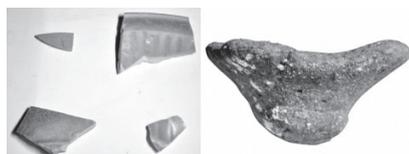


図11 近世・近代以前の遺物
左：中国産の青磁磁器（グスク時代）
右：土器の底部（弥生～平安並行時代）

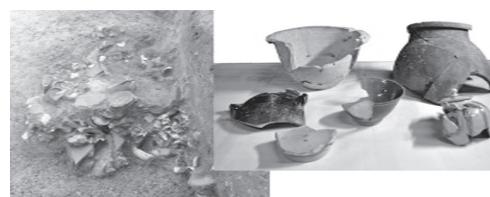


図10 廃棄穴（遺物廃棄土坑）
穴を掘り、そこに陶磁器や動物の骨・貝殻など廃棄したとみられる。当時の陶磁器の種類や食べ物などが分かる重要な遺構である。

小禄第二国民学校（小禄尋常小学校）校歌 採譜再現譜の紹介



平良 徹也

（県立芸大附属研究所 共同研究員）

採譜・構成・楽譜制作 長嶺 和子
聞き取り・録音・資料案内 平良 徹也

本歌は宮良長包（1883～1939）¹の作詞・作曲（但し制定年不明）によるとされているものではあるものの、沖縄戦によって破壊された同校と共に楽譜などの関係資料の一切が失われ判然とはしていない。ただ近年、歌詞については同校卒業生からの寄稿による歌詞資料が『那覇市教育史 資料編』（2000年 那覇市教育委員会）に紹介され、ようやく目にすることが出来るようになってはいた。しかし楽譜については同資料にも掲載されてはおらず、どの様に歌われていたのかが、やはり良く分からないままとなっていた。

どう歌うのか、小禄第一国民学校校歌との比較をするうえでもぜひ聞いてみたい。そんな思いもなかなか実現しない中、思わぬ形で機会が訪れた。小禄地域の三月遊びの調査と資料化を目指して一年に一字ないし二字²はと進めてきていた調査も7年目、字金城の婦人会の皆さんに御協力いただいた時、当日午後の拝所巡拝を終わって来ての公民館での暫くの休憩の暇に紹介された上江洲美代子氏（昭和4年生 字宇栄原出身・昭和11年同校入学～17年卒業）との何気ない会話から同校の校歌をめぐるこれまでの難関は一気に氷解、事態は好転した。

上江洲氏「私、東校（小禄第二国民学校）の卒業生よ」……

筆者「では校歌覚えていませんか…歌詞のコピーをもっています…出来れば歌ってみてもらえませんか…」

上江洲氏「伴奏もないけど、大丈夫かな……」

筆者「ぜひお願いします。歌の録音さえあれば後で楽譜には採れますから……」

（注：会話は主題に関連したものにとどめ、要約したものである。：筆者）

本譜は上記のような経過で字金城在住の上江洲美代子氏に2014年4月18日（金）金城公民館において、同氏の歌の記憶を頼りに伴奏も無いままに歌って頂き、その録音を実施。その録音資料を音源に後日、長嶺和子氏（字赤嶺）が音声分析して譜面化した聞き取り採譜による再現譜³となったものである。

歌唱伝承・上江洲美代子 // 録音・平良徹也 // 採譜・構成編曲・楽譜制作・長嶺和子

（2014. 05. 05記 平良）

記 小禄第二国民学校は昭和16年の国民学校令以前の小禄尋常小学校で、字金城の地（ただし住所は字安次嶺地内）に立地したところから地域では^{カナクスクガッコウ}金城学校と呼ばれていた。またそれ以前には東部小禄尋常小学校としての時期もあったことから、^{ヒガシコウ}東校⁴とも呼ばれていた。校舎は木造瓦葺き平屋建て、校区は字金城、字小禄、字田原、字宇栄原の4カ字であった。（※昭和4年当時 生徒数666人学級数12：『沖縄教育』178号昭和4年8月） / 参考：当間学校 生徒数1011人 学級数21 /

註 ¹ 宮良長包は大正9年には、一年ほどだが小禄尋常高等小学校に校長として赴任している。しかし同校の校歌作曲に関わりがあるのかどうかははっきりとしていない。また小禄尋常小学校には赴任したことはないようだ。とは云うものの、大正8年に赴任した仲西尋常高等小学校では後年の昭和12年にはあるが作曲の労を取っていることから、過去の赴任校や依頼を受けての作曲の可能性は考えてもよいのかもしれない。今後の課題であろう。

² 三月遊びを実施している字は現在でも二十五字（他市町村含め）もあり、それが期日的に重なるため、同時的には調査出来なかった事情がある。（また男性であるからと調査の遠慮を求められ、機会が得られるまで待たされたことも確かである）。

³ 長嶺和子氏は本会報誌17号掲載の「小禄第一国民学校」校歌の楽譜の採譜再現も行っている。

⁴ ^{ニシコウ}西校、西部小禄尋常小学校→小禄尋常高等小学校（通称：当間学校）→小禄第一国民学校（昭和16年）/戦後 高良初等学校（現 高良小学校）

追記 後日、字田原在住の與儀光枝氏（昭和5年生）にも、同校校歌を字田原與儀門中5月ウマチーの調査の際に時間を作って歌唱していただき、参考にすることが出来ました。上江洲さん與儀さん、採譜再現へのご協力ありがとうございました。

— 小祿尋常小学校（金城学校） —

小祿第二国民学校校歌 採譜再現譜



長嶺 和子
元松川小学校長

作詞・作曲 宮良 長包 / 歌唱伝承 上江洲美代子
採譜構成編曲・楽譜制作 長嶺 和子



1 み あぐ る お か は が ざ ん び ら
2 の そ め ば お ひ か は ん の っ び う ら
3 き よ う ど う い い ろ し っ ち こ は ん か ん ぎ り



み どり も ふ か き な う み き ま い つて
ぶ とりか も む め く み に な う る ほ し な ば
わ が ほ ん ぶ ん を つ っ く し な ば



の ほ る あ さ ひ に て り そ い て
お ほ た つ あ ひ ど う ひ な い そ な ひ や い く て
ち とく の じ ひ か り ない や ま さ ん



ち とせ の い ろ を し ま め す な り り
わ げ れ よ は か げ と わ こ が も り
は め よ は け ら げ と わ こ が も り

『那覇市教育史 資料編』
二〇〇〇年那覇市教育委員会編

歌詞出典

一 見上ぐる岡はがざんびら
緑も深き並木松
昇る朝日に照りそいて
千歳ちとせの色をしめすなり

二 望めば広し那覇の海
文化の恵にうるほいて
生ひ立つ児童七百余
我に力と誠あり

三 協同一致根かぎり
我が本分を尽くしなば
知徳の光いや勝まさん
励めよ励めよ我が友よ

【寸評 三島わかな（県芸大非常勤講師）2017年11月】

本歌は平易で、（歌詞形式を楽曲形式との合致の面で）分かりやすい。
旋律線も戦前の校歌の特徴のひとつが、付点のリズムの使用にあると思います。
その点では、今回の二校（第一・第二国民学校）とも、典型的な校歌の旋律線だと思います。

古琉球山南赤嶺村の村立て



幹事 長嶺 弘善
（大学非常勤講師）

沖縄史における1600年前後は、古琉球から、薩摩侵攻（1609年）を契機とする近世琉球への移行期である。赤嶺勢理客（勢理客大親）は、その時代の豊見城間切赤嶺村の人で、仲本門中の中興の祖として活躍した。門中に伝わる由来記・系図をもとに、様々な史料を読み解くことで、赤嶺勢理客は仁・知・勇を備えた人物であり、1560年（尚元5年）生まれと推測した（拙稿ガジャンピラ19・20・21号等）。門中の世代承継を1世代25年とする推計（ガジャンピラ14号）に基づくものである。

仲本門中始祖は、佐敷間切新里村並里家に出自する並里大主（仲本元祖）である。赤嶺の地にやってくる、「根屋」として赤嶺村の村立て（村づくり）を行った。だが「久しく相続」した後に「世子」がなく、久志間切慶佐次村新里家から来た慶佐次大親（赤嶺慶佐次）が、養子入りして仲本家を相続した。それから「数代」続いた後、勢理客大親が誕生する。しかし、並里大主から勢理客大親まで「久しく」「数代」合わせて何代になるのか不明で、村立ての年代を推測できない。なお、養子入りしたのは「慶佐次大主」と記されているが、門中墓アジシー碑銘に従い「慶佐次大親」と記す。また、行政区画「間切」の編制は尚真王代（1477～1526年）とされる（沖縄タイムス社1983年『沖縄大百科事典』）。赤嶺村創設の頃は、間切はまだ確立してないだろうが、便宜的に使う。本稿で赤嶺村創設年代を考察する。

佐敷新里から来た並里大主の父並里按司は、玉城間切仲村渠村免武登〔ミントン〕家仲村渠大君に繋がるとされる。琉球開闢（かいびやく）神話の世界が由来記に伝承されている。また慶佐次大親は北山世主に繋がる。仲本門中では、今帰仁上りと南部廻りとを、7年毎の東御廻い〔あがりまゝい〕として出自先を巡拝している。先祖の来し方を逆に辿る参拝である。

佐敷新里村は、並里按司の子孫である先住民の並里系統3門中と、「その後（14世紀初期）」の移住者である別系統門中とが、共に農漁業で暮らし発展してきた（佐敷町字新里区200

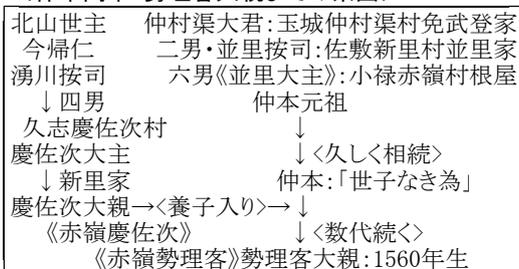
0年1月『字誌新里』70・564頁）。つまり、新里村は13世紀（1200年代）以前に創立されたことを示す。仲本門中が参拝するのは、先住並里系統の嶺井門中の御神屋である。並里按司の六男並里大主（仲本元祖）は、新天地を求めて新里村を出た。想像するに、家族あるいは同士〔ドゥシ〕が一緒だった。古琉球山南の東方・佐敷間切から、西方へと横断して豊見城間切にやってきた。そして、ハゲーラ川中流域（現・暗渠）北側に面する肥沃な赤嶺安里原の地に至り、そこを新天地と定めた。現在の、さつき小学校西北側からモノレール線路の間に当たる。並里大主は、「士〔さむれー〕」並里按司の子でありながら、「農〔はるさー〕」として新たな人生を切り開いた。開拓が始まり、村づくり・村興しが始まったが、その年代を由来記・系図では特定できない。なお、土農分離は王府系図座設置（1689年）で明確となるが、それまでは流動的である（ガジャンピラ14・15号等）。

赤嶺村は、並里大主の子孫が増えて発展したであろうが、いつしか仲本家直系に後継者がいない事態に至った。そこで慶佐次村新里家から来た慶佐次大親が、「養子入り」して仲本家を相続した。それから「数代」（4代として100年）後の勢理客大親誕生（1560年）から逆に推測すれば、慶佐次大親の養子入りは1400年代中期のことであろうか。ところで、山北名護間切と山南豊見城間切とでは、地を隔てること甚だしい。どのような縁があったのかと想像する。慶佐次大親は養子目的で来たのではないと思われる。新天地を求めて慶佐次を出立した大親は、赤嶺村又は近辺に移住して働き者と評判だった。そこで、「世子」がない仲本に見込まれ、娘婿として養子入りした。仲本家に後継男子はなくとも、直系血筋が絶える養子縁組ではなく、娘を通して仲本家は継承されたのである。婿養子となった大親は、赤嶺慶佐次と称したであろう。なお、名護間切慶佐次村の発祥は始祖「慶佐次大主〔ギサシウフヌシ〕」によるのであり、「北山系統の士族、湧川按司の次男」という。そして始祖大主の直系は断絶したが、有力4門中が派生し、部落が発展した。その中心が新里門中（新里家）だという（東村役場1987年12月『東村史 第1巻 通史編』123・266頁）。仲本の養子となった赤嶺慶佐次は、新里家に出自する。仲本門中の今帰仁上りでは東村まで足を伸ばし、始祖慶佐次大主を初めとする上代の先祖を祀る大殿内と、慶佐次川右岸マングローブ林内の共同墓（按司墓、赤嶺慶佐次先祖埋葬）を参拝する。

ところで最近、全く意外なことから、赤嶺村の村立て（創立）時期に関する重要な手掛かりが得られた。

仲本門中には十数回の年中行事があり、多くは門中御神屋で行われる。その際、他の門中あるいは個人か

＜仲本門中・勢理客大親までの系図＞



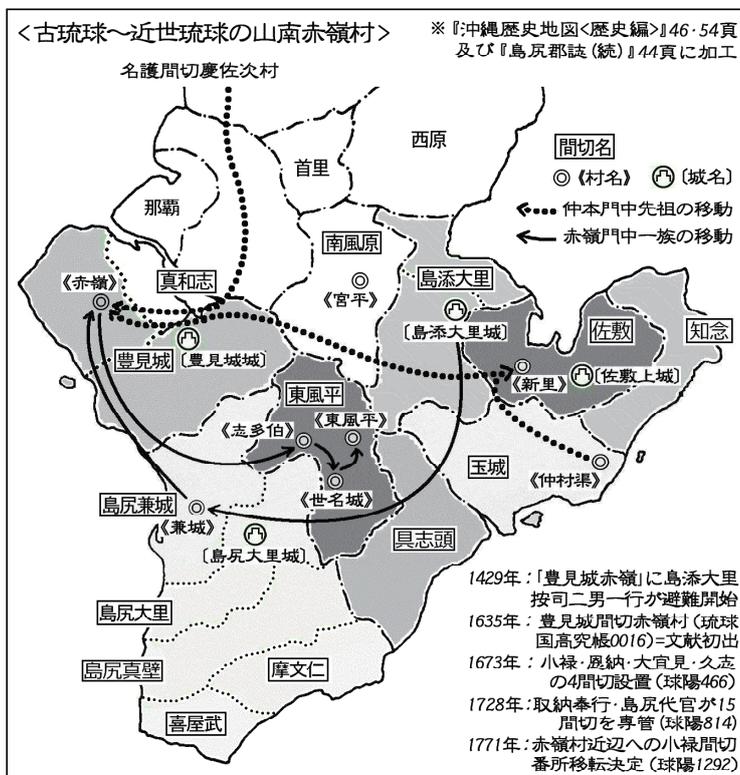
ら参拝・賽銭寄贈がなされることがある。その中で、「八重瀬町東風平・赤嶺門中」名の浄財入りの封筒が、毎年2回郵便受けに入れられ、あるいは玄関ドアに挟まれていた。だが先輩古老に心当たりがなく、名前が赤嶺門中なので、仲門門中のように仲本から分岐した一族であろうかと、謎であった。そこで筆者が門中当番〔アタイ〕になったとき、旧盆前日に郵便受けの側に連絡依頼文を掲示したところ、しばらくして先方から文書連絡が来た。赤嶺門中代表及び会計の連名で、毎年「新正・旧盆」に賽銭を供え、また清明祭には仲本門中墓にも参拝していると記されていた。

1400年代初頭、古琉球三山鼎立時代が終わり第1尚氏王統が始まる頃の、赤嶺門中成立の物語である（東風平町教委2003年10月『資料集 我如古楽一郎』2頁）。佐敷から勢力を拡張した尚巴志は、山南王他魯每（島尻大里）を滅ぼして三山統一（1429年）する前に、島添大里按司を討った（『球陽』74）。島添大里按司の二男「大宗加仁古大屋古」（1428年生）は、恐らく家臣らと共に、追っ手から逃れて兼城村に身を隠し、更に「豊見城赤嶺村」に避難した。一行はその後、志多伯村に移り、尚円王統（第2尚氏1470年）に変わったので世名城村に移転し、曾孫（4世）の代に東風平村に移住し定着した。初代山南王承察度に連なる「士〔さむれー〕」「武将達の子孫」である大屋古一族は、40数年間、避難を余儀なくされた。そして彼らは、赤嶺村での仲本門中の尽力を子孫に伝えた。約600年後の現在まで、赤嶺門中末裔が仲本門中へと参拝している。

赤嶺門中系図（『資料集』）によれば、始祖（一世）加仁古大屋古の子（二世）は「金城」掟親雲上と称し、孫（三世）は、唐旅・交易により財を成した金満家で「赤嶺」親雲上と改姓した。そして4世以下15世まで「赤嶺」姓である。16世宗家が始祖にちなんで我如古姓に復帰・改姓し、17世が我如古楽一郎である。楽一郎は、僅か13歳で沖縄県医院医学講習所に一期生として入所（1885年）した才人で、医師・衆議院議員として活躍した。謝花昇と同時代の人で、謝花が精神を病んだとき主治医として奔走した（『大百科』・『資料集』229頁）。18世宗家は、島添大里按司の「裔孫」（末裔）故に、戦前、島添に改姓した。現在の19世当主・島添文雄氏は、大屋古より505年後の1933年生まれであり、1世代約28年で承継してきたことになる。由緒ある「加仁古」から子・孫がわざわざ氏姓を変えたのは、避難先の兼城村（金城と同音）や赤嶺村との縁によるのではないかと推測される。また門中名を「赤嶺」と称し、宗家屋号を「赤嶺」とするのは、最遠の地＝赤嶺村で匿われたこと、仲本門中への恩義からではと考えてしまう。島添氏も、明確な伝承はないがその可能性が大きく、赤嶺村滞在が長期に及んだであろうという（2014年9月21日談）。なお同名「赤嶺村」が東風平間切に一時存在したが、1600年代後半に志多伯村に編入された（八重瀬町教委03年3月『殿・御嶽・井戸調査報告書』、15年3月『八重瀬町の歴史（概要版）』）。赤嶺門中と無関係と思うが、一族移動に伴う創設・消滅なのか検討課題である。なお赤嶺門中は、婿取り伝承がある具志頭新城上原門中（9世「賀養子」出自先）と、玉城富里仲栄真城（尚巴志の孫・八幡加那志居城拝所）を参拝する（清明祭2017年4月9日島添氏談）。八幡加那志は、第1尚氏最後第7代尚徳（1460年代）の弟で、地域住民に慕われていたという。門中と王統との和解やその功績があったのか、不明である。

1400年代初頭に、島添大里按司二男・加仁古大屋古（赤嶺門中始祖）の一行が、赤嶺村に集団で避難した。一行を、第1尚氏王統からある程度長期にわたり隠匿するには、それ相当の勢力・財力が必要である。赤嶺村は、草創期の村ではなく、ある程度成熟した村だったであろう。並里大主他わずか数名による村立て（創立）から、人口・生産力も増えて発展していた。大主から数世代数十年（ないしは100年）を経ていた筈である。すると、古琉球山南赤嶺村は、1300年代初期（約700年前）ないし中期には既に創設されていたと考えられる。

なお、仲本門中は赤嶺慶佐次が、また赤嶺門中は9世赤嶺筑登之が、婿養子として門中宗家を継承した。門中始祖からは女系血筋で継承されたのである。偶然であろうが、時代を先取りした先例として興味深い。



写真でつづる《うるくの^{かお}貌》

ガーナームイ（鵜森）

那覇市指定文化財

名勝：天然記念物

4枚の写真を見るとガーナームイは、国場川河口（漫湖）の中にある小さな島でした。現在の国場川河口周辺は大半が埋め立てられてしまい、ガーナームイも地続きになっています。かつて、奥武山からガーナームイにかけて景色は、名勝地として有名でした。

この森にはナハキハギが群落をなして生育しています。

ナハキハギは、東南アジア・太平洋諸島・中国・台湾等に分布するマメ科植物です。沖縄島はナハキハギの北限地になっています。

ガーナームイの名は、その小島が、ガーガーとうるさい鷺鳥が棲んでいたのでついたとか、タンコブ（がーなー）のようだからとか言われています。



小祿から望むガーナームイ・戦後



古波蔵から望むガーナームイ 1958年頃



戦後埋立前のガーナームイ 提供：小祿画廊、上原隆昭氏



ナハキハギ



軍港ゲート付近から望むガーナームイ 1952年頃